

教育課程と子どもの学力・評価

「確かな学力」を獲得していく過程を見つめ、子ども・学校・地域の共同が創り出す教育課程を目指して

中山晴生

## 一．はじめに

教育内容に土足で踏み込んでくる昨今の教育政策に、現場の混乱している。そして、上意下達の教育実践が幅をきかせ、「子どもから出発する」実践が隅に置かれる。そして、「自分がヘンなのかな：」と疑いを持ち、自分を維持していくことさえままならない現状があった。その中で子どもの発達成長を最善に考え、したたかでしなやかな教育実践が語られた。今の現場の方向性を照らす議論になった。

## 二．報告の概要と討論の様子

### 報告①

あつ それじゃあけんかになっちゃう

く 三年生が見つけた「学ぶ」意味く

釧路教職員組合 笹本裕一

### 〈報告と討論の概要〉

ただ、与えられた事項を学習するだけではなく、子どもたちの生活の中に入り、そのことを学ぶことで自分たちの生活がより豊かになっていくことを実感していく様子が報告された。と

りわけ、わり算プリントが正確にできることで、「できた」喜びを味わうだけにとどまらず、子どもたちが「わり算って、けんかしないための計算、仲良くするための計算なんだ」と実感していく。その様は、「学ぶ意味」を蔑ろにしやすい「全国学テ平均点以上に」というスローガンの下の教育実践とは一線を画し、まさに、教師としての専門性を問い、「学び」をつくっていく上での方向性を示すものとなった。

### 報告②

育(Hug)フェスタから、自分の立ち位置を考える。

檜山教職員組合 佐藤亮樹

### 〈報告と討論の概要〉

「今の『自分』が『自分』になっていったのは何か」。そう問うたとき、祖父が浮かぶという。その祖父とのかかわりを今の立ち位置で語るのが「育つ」という意味をとらえ直せるのではないかと氏は語る。「出身地が『ふるさと』になる瞬間があった。それは、履歴書に書かれるような文字だけの出身地という肩書きだけにとどまらず、人の顔が思い浮かび、人の温かさを感じる」ことで、『ふるさと』に変わっていくのではないかと考えるようになった」と語る。学力は数値だけではないと思っっているが、子どもたちは将来、数値で判断される入試や就職の採用試験を経験することが予想されることはわかっている。それも無視できないが、人が「育つ」ということは、もっと豊かに考えないといけないのではないか。「育つ」土台として「出身地」が「ふるさと」になっていくことはかかせないのではないか。そして、人の幸福を追求することとは何か、多角的に物事を見

る視点が大切ではないだろうか。

### 報告③

「学テ向上路線」が貫徹される中で「村を育てる学力とは何か」を考える。

く育（Hug）フェスタ等の取り組みを通してく

檜山教職員組合 中山晴生

### 〈報告と討論の概要〉

檜山で暮らす青年・教職員達がつながりあう集まりを模索した。この檜山で「語り合う場」「生き方を問う場」「つながる場」「地域を意識する場」をつくれないうものかと。そんな場を願って、7月末に「育（Hug）フェスタ二〇一四」を開催した。内容は、大人になった教え子達が語る「しゃべり場」、子育て中のママ達のおしゃべりの場「Hug Cafe」、リフレクションで学びあう「よいところゼミ」、一次産業に携わる教え子・料理人の教え子達がつくる「地元めし」、地元と東京のライブミュージシャンがつくる「清和の丘ライブ」等々。本物の学力とは何だろうか。「やっぱりこの地域が好きだ」「ここで生きていきたい」と戻り、ふるさとをつくっていかうと若者たちを支える学びは何なのか。「学テ路線」が貫徹される一方で、自分たちの地域を育てる「学力」とは何かということを考え合った。

### 報告④

綴り方的道徳指導の試み

空知教職員組合 平川美和

### 〈報告と討論の概要〉

「良いこと」は、本当に良いことか。「これは良いこと、こ

れは悪いこと」と求められる答えが強要されるような徳目主義的な授業ではなく、立場が違うと、ものの見え方が違うことがあることも考えさせたい。オニの子どもの「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました」というつぶやきを提示した。そして、もめごとがあつた場面をAさんの視点からとBさんの視点から書かれたものを提示して考え合った。「良いと思ふことでも、立場が変われば良いとは限らない」という心の揺さぶりをかけ、「本当に良い行動とは何だろう」という授業を展開した。徳目的な概念形成だけでは、子どもたちの生活の中にある頻繁なもめごとを乗り越えることは難しい。それを乗り越え、より豊かな人間関係を築いていく手立てとして「相手の立場に立って考えること」は欠かせないと考えている。

### 報告⑤

教室と世界はつながっている。

く大学での「教職概論の授業の試み」く

北海道子どもセンター 谷

光

### 〈報告と討論の概要〉

3つの問題提起があつた。とりわけ、一つ目の「指導する側とされる側の感覚のズレはどこからくるのか？」という提起は、今の学校現場をリアルに映し出すものであつた。例えば、「すぐ手を出す子」に対して、指導する側は、「暴力はいけないことをわかってほしい」という価値観を直接ぶつけてしまうことで子どもも反発、あるいは表面的な反省を引き出す。「暴力はいけない」という願いを持つことは間違えではない。しかし、どうしてそんなことをした

のか？その行為の裏にどんな子どもの思いがあるのかという「声」にならない「声」を聴き取ることが大切ではないかと。価値観を直接ぶつけるだけだと、例えば、「若い女の先生が細かく注意するので、イライラする」という感じで余計爆発し、「きつい男の先生には反抗しても無理なので、静かになるが、『どうせ言ってもムダだし：』とつぶやきが増える。その場合、管理職は「落ち着いた」と評価してくれるかもしれないが、本当に荘なのだろうか。子どもの居場所は失われていくことになつてはいないだろうか。今、「ゼロ・トレランス」「道德の強化」の中にある学校では普通にある風景。ここをどう乗り越えていくかということが議論になった。

二つ目の「大学生と学んで」では、対話や論議を重ねる講義の大切さが浮かびあがり、互いの考えを出し合い、それを尊重しながら自分自身の価値観を育んでいく様子が語られた。三つ目の「今子どもが求めている学びとは」では、やはり、「本当にそうなのだろうか」という「問い」をつくりだし、求めていくことの大切さが語られた。そして、教育は「協育」「共育」ではないか。

子ども・保護者・教職員の三つの共同の大切さが確かめられる議論となった。

## 報告⑥ 「道德教育」をあらためて考えてみませんか

「道德の指導法」の授業から

北海道教育大学札幌校 柳 憲一

## 〈報告と討論の概要〉

教員養成大学の「道德教育」の講義をどう考え、どのように組み立て、明日の教員が「道德」の授業をどのような立ち位置で考えることが大切なのかということを見通しながらの報告がなされた。「東日本大震災から授業を考える」「道德教育は『道德的』？手品師から考える」「子どもはどんな世界に生きているか」「子どものモラルと道德教育」「総合的な学習の時間・特別活動と道德教育」「道德の歴史」「学習指導要領」「道德の授業づくり」等、全一五回の講義は、その概要、歴史はもちろん、現代社会が抱える諸問題から「問い」を立ち上げ、多様な価値観の共有を大切にされたものであった。とりわけ、多様な価値観が書かれた学生の感想を読みあい、共有し、論議する中で、さらに自分の考えや価値観の広がりを作っていくその様は、徳目的な価値観を教授する方法とは一線を画し、今後の道德の授業づくりでは何を大切にしなければならぬかという方向性を示したものである。

## 報告⑦ みんなでつくる教育

### 〈報告と討論の概要〉

宗谷教職員組合 遠藤 玄

子どもたちは、学校に登校する前に、様々な生活を背負っている。しんどさを抱えて学校生活を余儀なくされる子どもたちが多くいることは、私の学校だけではないだろう。もちろんもめごとや「荒れ」と呼ばれる現象はある。その際に、「けんかのため」「なかよくしなさい」ではなく、その言い分をよく聞き、

そこから考えさせることを大切にしてきた。時間はかかるかもしれないが、そういうことが、子どもたちが落ち着くキーワードのような気がする。そして、そういうことを学校で共有することが大切ではないかということを確認め合う論議になった。

### 報告⑧

子どもたちの実態を大切にした教育課程・学級づくり

宗谷教職員組合 非公開

### 報告⑨

新課程・理数先行実施の学年を「進学校」で三年間担任してきて

北海道高等学校教職員組合 徳長 誠一

#### 〈報告と討論の概要〉

入学当初は、「塾で勉強したもん」という雰囲気を出す生徒もいたが、学年が進むにつれて激減する。新教育課程は、生徒・教員共に、そして、理系だけでなく、文系も理科の負担感がある。9月中旬頃に理科の教員が「教科書はあと一〇〇ページ以上も残っていますよ」と語っていた。また、その他の進学校でも朝講義、ランチ講義などがあり、受験対策に追われ、多忙化する各地域の進学校の生徒の実態が語られた。

小中高を串刺しにした討議の中で「義務教育で、興味・関心から出発し、探求していくような授業をくぐり抜けた生徒は、受験でも伸びる生徒が多い。それは、『先生、何でそうなるの?』という問いを投げかけてくる場合が多いから。エビデンスがあるわけではないが、印象としてある。大学受験クリアするこ

とだけに限定しても、ただ、詰め込むだけのものではない探求型の授業づくりが大切」と語られた。学テの点数を向上するだけの授業にシフトしすぎている義務教育の実態も語られ、子どもの興味関心から探求する授業づくりの具体も論議になった。

### 報告⑩

高校における土曜授業の取り組み

北海道高等学校教職員組合 本多由紀子

#### 〈報告と討論の概要〉(代理報告)

トップダウンでの土曜授業研究指定校。7時間授業を行っていたが、それを解消したいという授業者の意見も尊重したいが、管理職と折り合いがつかない。導入の本当の目的は、教育条理よりも「授業時数の確保」という数値の問題ではないかと疑わざるを得ないことがあった。生徒の発達・成長を保障するためには、7時間授業の検証が必要だった。とりわけその弊害は、「生徒の集中力の低下」「バス時間の問題」「清掃が簡易になる」「進学講習ができない」「進路に関わる、面接・小論文指導がしづらい」「部活動が短くなる」「会議が入れられない」「生徒事故が起きたときの対応が難しい」「職員の長時間勤務の要因」「生徒が下校時刻と退勤時刻がほぼ同じ」などがあげられた。

そのようなことを論議し、7時間授業は結果的に解消された。このことから土曜授業は好意的に受けとめられている。反面、教職員の勤務時間が増えてきたという問題も残る。7時間授業と土曜授業：。今天秤にかかっている。今後、教育条理を大切

にし、その検証をしていかなければならない。

## 報告① 進学校における学校づくりをどのようにすすめるか P

A R T I

北海道高等学校教職員組合 松代峰明

### 〈報告と討論の概要〉

『勉強させられている』と感じている生徒が多い」「著しく学習意欲に欠ける生徒が多い」など、様々な課題がある。学校としてどう取り組むかが問われている。協力共同の学校づくりをするためには、管理職も含め、職場の合意作りが必要。中教審のまとめに「批判する力」「議論する力」「多様な他者の考えや立場を理解する力」「労働者としての権利と義務？の理解」などがある。また、国立教育政策研究所教育課程研究センターも、「単なる経済社会的な変化への受け身の対応ではなく、多様で『自立』した個人が『協働』することにより、新しい価値や社会の変化自体を『創造』することが期待されている。変化の激しい社会であるからこそ、各自の人格を尊重し、異なる考えを認め合い、生かし合って、民主的で文化的な国家を形成する主体となることがいっそう求められていると考えられる」とある。念入りな分析が必要であるが、そこをも論拠にしながら、①授業の改善（主体的に学ぶ）②「現代社会と人間」を軸としたキャリア教育（自分の生き方に迫る）③生徒会活動の活性化（学祭等を生徒の学びの場に）そして④この3つの関連を強めることで教科の学力も向上するのではないかという報告であった。今後の継続的な取り組みに注目されるものとなった。

### 〈総括〉

管理統制の教育政策の中で年々現場は困難を極めている。進学校の受験対策による多忙化は、教員も生徒も苛酷なものになってきている。また、義務教育も教育内容まで踏み込まれ、道徳では徳目主義的な指導が懸念される。その中で、教育条理を大切にし、したたかに実践を積み重ねている報告に励まされる。今後も研究者と一緒に「人格の完成とは？」「学力とは？」という論議を深め、地道に、そして、したたかに小さな共同からつくっていくことが求められる。